

機関番号 : 12611

研究種目 : 基盤研究 (C)

研究期間 : 2008~2010

課題番号 : 20500646

研究課題名 (和文) 服飾の史的現象によるジェンダー感性論

研究課題名 (英文) A Study on Gender Sensibility based on Historical Phenomena in Fashion

研究代表者

徳井 淑子 (TOKUI YOSHIKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号 : 80172146

研究成果の概要 (和文) :

男女の性が服装によって明確に二分化されたのは、洋の東西を問わず近代社会においてである。日本では、それが国家および知識階級の要請によって行われ、政治的な意味をもったが、一方でヨーロッパでは資本主義社会への転換のなかでブルジョア倫理として要請され、社会・経済的な意味を帯びている。近代社会では男女の服装の乖離が顕著であるのに対し、中・近世社会では服装による男女の分化は必ずしも鮮明ではない。現代社会では同化、接近、越境はさまざまなレベルで絶え間なく行われ、それによってファッションの多様化が進み、二元論的な性では捉えられない複雑な性のあり方を示している。男女の服装の同化・接近・越境は新たな感性により新たな性の表象として現出するが、同時にジェンダー表象としてつくられた新たな服飾が、新たなジェンダー感性を育んでいくことも確かである。

研究成果の概要 (英文) :

It is after modern society both in the Eastern and Western worlds that human sexuality was clearly split in two, i.e. masculinity and femininity in terms of fashion. In Japan it was promoted by the request of nation and intelligentsia of that time, which had become to take on political character, while in Europe it was implemented as bourgeois ethics on the transition stage toward the capitalist society, which had become to take on a social-economic character. The distinction of clothing styles between masculine and feminine is clear in modern society, however it was not so clearly differentiated in the middle and the early modern ages. In the contemporary society, since the diversification of fashion is accelerated which is due to assimilation, approaching, and cross-border done continuously at various levels, the aspects of sexuality become very complicated so that it cannot be analyzed in gender dualism. Although the assimilation, approaching, and border transgression in fashion between the sexes emerge as a novel model of sexual representation by means of new sensibility, it is also certain that at the same time the new fashion created as gender representation, nurtures such new gender sensibility.

交付決定額

(金額単位 : 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学一般・生活文化

キーワード：服飾・感性・ジェンダー・異性装・色彩・身体・視覚表象

1. 研究開始当初の背景

衣服とジェンダーの関わりについて、服飾の史的研究の領域では自明のこととして見過ごされ、そこに性差の文化を読み解くものはきわめて少ない。もちろん男性と女性の服飾の形状や装飾の違いなどの事実分析は東西の服飾史で行われてきたが、性差の文化に踏み込み、ジェンダーをめぐる感性まで論じたまとまった研究はない。ただし近年、これまでの服飾史をジェンダーの視点で読み直そうとする傾向はあり、たとえば『服飾を生きる—文化のコンテクスト』（横川公子編 化学同人 1999年）において、いくつかの試みがなされている。

一方、これまで主にジェンダー論として服飾を論じてきたのは、社会学や精神分析学の領域において行われてきた異性装の問題である。男装・女装という事象は長らく個人的な性向に結びつけられて語られてきたが、近年では社会と文化の構築物とする認識に立て論じるものが主流となった。日本においてその先鞭をつけたのは、石井達朗の『男装論』（青弓社 1994年）、及び『異装のセクシュアリティ』（新宿書房 2003年）である。ここに異性装研究が史的な領域でも行われる土壌が形成された。

本研究は、これらの問題意識をさらに進めて、異性装はもちろん、日常に確かに存在する男と女の衣服の違いを対象として、それを生み出したジェンダー意識を分析する。分析は社会意識に留まらず、その意識が感性のレベルでいかに性差を生み出したかを明らかにする。感性におけるジェンダー、すなわち感性の性差を論じることが課題である。

2. 研究の目的

本研究は、服飾が生み出す性差の文化を、歴史的事象の分析を通して、特に感性論との関わりの中で考察しようとするものである。すなわち、どのような服装が男らしく、また女らしいと認識されるのか、その事実を明らかにした上で、認識の経緯と継続性あるいは変容を感性の領域において分析・考察する。

何が男らしく、また女らしいと感じさせるかはきわめて感性的な事象であるが、それを成立させる社会意識が常に背景にあり、その意識は新しく創成されたものである場合もあるし、また長い時間の経過の中で受け継がれてきた伝統的な意識の集積である場合もある。本研究は、服飾における男性性と女

性の主張が、日本とヨーロッパの各地域において、中世から近代にいたる歴史のなかでいかになされてきたかを検証することによって、現代社会の性差の文化を支える感性を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

服飾が男女の性別によって分化されるなら、それゆえに逆に男女の服装の接近あるいは同化の現象が起きる。あるいは異性装という男女の服装の越境という現象が現れる。衣服とジェンダーの関係を論じるのに、このような視点はもとより重要であり、ゆえに服飾の接近・同化・越境のテーマは本研究の大きな部分を占める。特にヨーロッパの歴史のなかでこれらを検証するとき、その事例にはこと欠かない。日本のきものと異なり、ヨーロッパの衣服はいつの時代にもきわめてはっきりと性差を示しているからである。スカートが女性の代名詞であり、ズボンが男性の代名詞であるのもこのような情況のなかで生まれている。性差が明確であるがゆえに、異性装はきわめて社会的な意味合いを帯び、特に女性の男装の事例は、中世以来さまざまな意図のもとで行われている。本研究では、これらのなかでも特に注目されてよい近代フランスにおける異性装と、それに類似する現象について、女流作家ジョルジュ・サンドや女性サン・シモン主義者の服装、またカーニバルなどの仮装における男女の服装の混淆について調査し、ジェンダーをめぐる時代の心性を示したい。

本研究のもう一つの視点は、男らしさと女らしさが歴史のなかでいかに変遷し、多様であったかを示し、それぞれの時代と地域におけるジェンダーの観念を示すことである。そのためには、服飾と周辺の生活に関わる感性的なものを明らかにしなければならない。

近世フランスを例にすれば、清潔の観念が服装の礼儀と密接に結びついているという事例がある。もちろん清潔の観念も時代によって異なり、物質的な清潔さとともに精神的な清潔さも加わり、それぞれの内容に時代の感性の特徴を見出すことができる。あるいは羞恥心という感情もジェンダーと服飾に大きく関わる要因である。言うまでもなく羞恥心もまた文化の構築物であり、なにを恥じるべきかは男女によって相違する。羞恥心は身体に関わるものと、感情に関わるものとの両側面があるが、それらが相まって服装に及ぶことは言うまでもない。

男女の服装の差異は、形状もさることなが

ら、色や文様に現れることも今日の社会になお存続することである。いったいなぜ男ものの色と柄、女ものの色と柄が存在するのか。形状の差が比較的小さいとされる中世ヨーロッパの服飾には、これらの差が歴然としてある。織物素材が豊かになった近代以降では、素材の違いにも男女の衣服の差は現れる。形状・素材・色彩・文様のさまざまなレベルで、男女の性差がいかにつくられ、そして同化や越境が行われてきたかを具体的な事実検証によって明らかにし、それぞれを支えるジェンダーの観念を考察する。

最後に、各研究者の史的・実証的調査の結果をまとめ、西洋の各時代の現象、及び日本の現象の相互の比較・検討を通して、ジェンダー感性論の構築に向けて考察する。とりわけ性差の接近・同化・越境が行われる際の感性の変化を捉え、感性システムの構造を明らかにすることにより、現代社会のジェンダー感性の特質を解明する緒としたい。

4. 研究成果

研究代表者・徳井は(1)西洋服飾、とくに中世と近代について、研究分担者・小山は(2)近世・近代の日本服飾について、分担者・西浦は(3)近世フランスの服飾について、分担者・新實は(4)近代フランスの服飾、とくに異性装について、ジェンダー意識および感性の分析を行い、以下のような研究成果を得た。

(1) 近代以降の西洋服飾史は女性服の男性服への越境の歴史として捉えられる。たとえば、資本主義社会において男性の勤労精神のシンボルとなった黒い紳士服は、20世紀の間に女性に共有される服装となった。ただし近世において黒服は、プロテスタントの倫理に支えられ、女性に排除される色ではなかった。すなわち近代以前を視野に入れば、女性服の男性服への越境として歴史を捉えることはできない。現代社会で女性性を象徴する暖色系の色やレース・リボン等の装飾要素は、中・近世には男女に共有され、女性の身体が貴族的な奢侈の場として残された近代社会において女のものとなった。近代社会で女性性を刻印された要素には以後、男性性の侵犯はなく、一方で男性性を刻印された要素には女性性の侵犯があり、これが女性服の男性服への越境という歴史観を生んでいる。

(2) 近代日本の服装変容とジェンダー感性との生成過程の連関性を明らかにした。形態が変わるとき、納得できる従来の理屈を用意した上で、革新的な形態を受け入れさせ、その後新たな形態に引き寄せられて感性自体が結果として変わる現場があった。国家的要請や知的階級の提案と密なる関連を持って格差が生じたのである。近代西洋の紳士服が国粹的・天皇主義的な粹組に絡んで普及した事象、明治20から40年代の女性服の改

良案や女性像の検討からは上下二部形式という服飾形態が、西洋風と日本の古代風という二つの意想に対し、辻褄合わせのように利用された事象を事例として取り上げること、その構造が明らかとなった。

(3) 18世紀フランスにおけるアングロマニー（イギリス心酔）の服飾流行から、当時のジェンダー観について、同時代の諷刺、批判文、ファッション・プレート等を手がかりに考察した。簡素化、男性化をキーワードに語られる流行の変化には、英仏という国家間、民族間の性格の違いや、階級、身分といった意識の問題が複雑に絡み合っており、こうした意識がアンシャン・レジム社会におけるジェンダー観の大きな特徴となっていることを明らかにした。

(4) 異性装に関する史的研究の書誌学的な調査を行い、最新の研究動向とその問題点を理解するとともに、近代ヨーロッパ、とりわけ19世紀前半のフランスにおけるジョルジュ・サンドおよびゴーチエ、バルザックなどの作家による小説・戯曲から、女主人公の異性装を表象分析した。そして女主人公の異性装が象徴するものを明確化することにより、各作家の女性性や性別二元論に対する意識を明らかにした。またサン＝シモン主義者やフリーエ主義者などによる服装改革、および女性運動から身体意識・身体観を探り、同時代の社会思想家たちが、性差の観念の発生要因をどのように捉えていたかを社会的・文化的背景の中で解明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

1 徳井淑子、「ペトラルキスムと涙のドゥヴィーズ」、『お茶の水女子大学人文科学研究』6巻、2010年、67-80頁、査読有

2 中部文子・渡辺千恵美・小山直子・館かおる・増永良文、「社会調査支援の為のWebページのランク変動特徴抽出」、『電子情報通信学会第2回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2010) 論文集』、2010年、pp. A2-5、全6頁、査読無

3 Y. Masunaga, Naoko Oyama, C. Watanabe, K. Ito, K. Tachi, and Y. Miyama “SERPWatcher: ASERP Mining Tool as a Novel Social Survey Method in Sociology, in Database Systems for Advanced Applications,” LNCS5982, DASFAA2010 Proceedings, Part II, Springer, 2010, pp. 412-15, 査読有

4 新實五徳、「異性装研究—近代フランスにおける服飾の社会表象—」、『大阪府立大学女性学研究センター女性学連続講演会「ジェンダーを装う」』14巻、2010年、71-100頁、査

読無

- 5 TOKUI Yoshiko, L' expression desplis dans la littérature médiévale: La «chemise ridée» dans les romans courtois des 12ème et 13ème siècles, *Actes du Colloque des Ptychoseis*, 2009, pp.67-71, 査読無
- 6 増永良文・渡辺知恵美・伊藤一成・小山直子・館かおる他、「新しい社会調査法としての検索エンジン結果ページ群の自動収集・分析装置の開発」、『電子情報通信学会第1回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2009)』、2009年、pp.D7-5、全6頁、査読無
- 7 新實五穂、「ジョルジュ・サンドの対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装」、『日本家政学会誌』60巻6号、2009年、49-58頁、査読有
- 8 新實五穂、「19世紀フランスの服飾と女性性—ジョルジュ・サンドの実生活における男装と対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装—」、『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要』8巻、2009年、93-104頁、査読有
- 9 Naoko Oyama and Yoshifumi Masunaga, “On the Trustworthiness and Transparency of a Web Search Site examined using “Gender-equal” as a Search Keyword,” *Progress in WWW Research and Development-APWeb2008*, LNCS4976, Springer, pp. 625-630, 査読有
- 10 新實五穂、「服装とセックス、ジェンダー—女性の異性装に関する史的研究の動向—」、『女性空間』25号、日仏女性研究学会、2008年、74-83頁、査読無

[学会発表] (計11件)

- 1 新實五穂、「社会表象としての服飾—近代フランスにおける異性装の研究—」、国際服飾学会東日本ブロック第2回研究例会、跡見女子大学、2011年2月5日
- 2 新實五穂、「性を装う主人公—対話式小説『ガブリエル』をめぐる—」、日本ジョルジュ・サンド学会研究会、南山大学、2010年10月16日
- 3 西浦麻美子、「ファッション・プレートを読む:18世紀フランスファッションへのいざない」、日本構想学会第3回フレッシュセミナー、お茶の水女子大学、2009年10月23日
- 4 新實五穂、「異性装研究—近代フランスにおける服飾の社会表象—」、第14期女性学連続講演会「ジェンダーを装う」、大阪府立大学女性学研究センター、2009年7月11日
- 5 新實五穂、「服装とセックス、ジェンダー—女性の異性装に関する史的研究の動向—」、第14期女性学連続セミナー「ジェンダーを装

う」、大阪府立大学女性学研究センター、2009年7月11日

- 6 新實五穂、「19世紀フランスの服飾と女性性—ジョルジュ・サンドの実生活における男装と対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装—」、第2回個人助成受託者研究報告会、東海ジェンダー研究所、2009年6月21日
- 7 徳井淑子、「中世仏文学の感覚と表現:14・15世紀フランスの色名・色調・色彩感情を中心に」、日本英語英文学会第4回大会シンポジウム、大阪府立大学、2008年12月7日
- 8 西浦麻美子、「18世紀後半フランスにおけるアングロマニーの服飾流行」、服飾文化学会第1回研究例会、お茶の水女子大学、2008年11月22日
- 9 徳井淑子、「モードの博物学:中世ヨーロッパの異国趣味」、日本家政学会服飾史・服飾美学部会研究成果公開発表会、学習院女子大学、2008年9月24日
- 10 新實五穂、「マダム・カンパンの回想記を読む」、「女性作家を読む」研究会第5回、日仏会館、2008年7月26日
- 11 Naoko Oyama and Yoshifumi Masunaga, “On the Trustworthiness and Transparency of a Web Search Site examined using “Gender-equal” as a Search Keyword,” *APWeb2006*, 中国, 瀋陽, 2008年1月17日

[図書] (計8件)

- 1 吉村耕二 (編)、徳井淑子他、『中期英語における自然・感覚・文化:資源としての中世人の感覚』、大阪教育図書、2011年
- 2 牛腸ヒロミ (著編)、徳井淑子他、『ものとして、心としての衣服』、放送大学教育振興会、2011年、195-238頁
- 3 徳井淑子、『図説ヨーロッパ服飾史』、河出書房新社、2010年、全111頁
- 4 新實五穂、『社会表象としての服飾—近代フランスにおける異性装の研究—』、東信堂、2010年、全225頁
- 5 伊藤亜紀、徳井淑子 (共訳)、『色彩の紋章』、悠書館、2009年、全200頁
- 6 山崎美和恵 (著編)、小山直子他、『物理学者 湯浅年子の肖像』、梧桐書院、2009年、448-57頁
- 7 新實五穂、『武装事典』、誠文堂新光社、2009年、全247頁
- 8 館かおる、小山直子、『テクノ/バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま ジェンダー研究のフロンティア 4巻』、2008年、73-92頁

[その他] (計6件)

- 1 赤阪俊一、柳谷慶子 (編著)、徳井淑子他、「色とジェンダー」、『ジェンダー史叢書 生

活と福祉』8巻、明石書店、2010年、123-125頁

2 徳井淑子、「着飾る男たち 1～12」『ふらんす』第85巻4～12号、86巻1～3号、2010～2011年（全24頁）

3 新實五穂、「書評 森田雅子『貞奴物語—禁じられた演劇—』、『ジェンダー研究』13号、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、2010年、81-84頁

4 館かおる、小山直子編、『湯浅年子公開資料目録』、お茶の水女子大学附属図書館、2009年

5 徳井淑子、「カラフルな聖堂とカラフルな衣」、「夏の美しい緑と魔物の無気味な緑」、「勤労を示す男の黒と貞淑を示す女の白」、『AFTジャーナル』37・38・39号、2008年（全3頁）

6 小山直子（学術協力・解説執筆）、「なでしこたちの挑戦：日本の女性科学者技術者（日本の科学者技術者展第五回）」パンフレット、国立科学博物館、2008年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳井 淑子 (TOKUI YOSHIKO)

お茶の水女子大学大学院・人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：80172146

(2) 研究分担者

小山 直子 (OYAMA NAOKO)

お茶の水女子大学・ジェンダー研究センター・客員研究員

研究者番号：00194639

西浦 麻美子 (NISHIURA MAMIKO)

お茶の水女子大学・生活科学部・学部教育研究協力員

研究者番号：80456277

新實 五穂 (NIIMI IHO)

お茶の水女子大学・生活科学部・非常勤講師

研究者番号：80447573